PROJECT

映像を通して見るイスラームの境界領域

文・写真
吉本康子

共同研究【若手】● 映像資料を活用したイスラームの多様性に関する地域間比較研究（2010-2012）

研究会の趣旨

アラビア半島で発生したイスラームは現在、中東の周縁にある中央アジア、アフリカ、南アジア、東南アジアなど近代以前にその伝播が進んだ地域から、ムスリムの移民が暮らすフランス、イギリス、アメリカ合衆国などの欧米地域にまで広がっている。本共同研究の趣旨は、世界のさまざまな地域で展開されている「イスラーム」の実態を、映像というツールを用いて視覚・聴覚的に把握し、その共通性と多様性について議論することで、イスラームの地域間比較を可能にするための共通軸を模索することである。

カンボジア、ウドンに暮らすムスリムの指導者。金曜礼拝の際は背後のミンバルに座ってクルアーンの一部を朗誦する。

イスラームに関しては、近年の宗教復興や再イスラーム化、イスラーム人口の高い増加率などを背景とし、多くの研究が進められている。既存の研究に特徴的なことのひとつが、中東、南アジア、東南アジアなど地域研究の枠組みにおいて進められていることである。本研究は、それぞれの関心領域を異にする中東、アジア、アフリカ、アメリカの各地域において研究に従事する者がメンバーとなることで、これまでに見られるような各地域間の研究面での断絶をなくし、通文化的に「イスラーム」という現象の検討を試みる。

本研究のもうひとつの魅力は、礼拝（サラー）、クルアーンの朗誦、モスク、ラマダンなどの要素に着目し、比較検討することで、地域を超えて統一性をもつものとして、あるいはイスラームの共通項として自明視されてきたイスラームの共通性自体の多様性を明らかにしようとしていることである。メンバーが自ら撮影もしくは収集した写真および映像資料を使って現在のイスラームの実態を社会的・文化的側面から捉えようとする本研究の試みは、記述や翻訳によるイスラーム理解の硬化を打破するものとしても意義があるといえる。

地域横断的な研究

以上の問題意識に基づき、本共同研究は東アジア、東南アジア、中央アジア、中東、西アフリカ、北アメリカを調査地とする11名が初年度のメンバーとなっている。メンバーの具体的な調査地は、マリ共和国（伊東未来）、中国（今中崇文）、エジプトとインドネシア（小杉麻李亜）、パレスチナ（菅瀬晶子）、アメリカ合衆国（椿原敦子）、カザフスタン（藤本透子）、インドネシア（阿良田麻里子、村尾静二）、イラン（山中由里子）、トルコ（米山知子）、ベトナム（吉本康子）と、地理的な意味で中東を「中心」と見た場合の「周縁」にも十分目配りできる範囲が対象となっている。

初年度に当たる2010年には、これまでに2回の研究会を開催した。上述したように、これまで研究面での地域的な棲み分けによって十分に精査されてこなかったイスラームの側面に着目することが本研究の特徴のひとつである。そのための方法として、まずはメンバー各自が個々のテーマに基づいて進めている研究成果の一部を、静止画ないし動画を用いて報告するという形をとり、各自の捉えた「イスラーム」を視聴し、比較しながら、共通の問題を設定していくという方法をとった。また各会では、映像資料を有効に用いるための研究の方向性について模索することを試みた。

初回は代表者である吉本による趣旨説明およびメンバー2名による報告を行った。今中は中国の回族とイスラームについての解説と映像作品『帰真する友をおくる――西安回族の葬送儀礼』の上映を、および、吉本はベトナムのムスリムについての解説と映像作品『もうひとつのラマダン――ベトナム中南部に暮らすチャム族バニのラムワン儀礼』の上映を行った。いずれも東アジアの漢字文化圏の影響を受け、また宗教的マイノリティとして社会主義国に暮らすムスリムの事例であり、死者に対する供養に着眼点を置いた報告である。続く共同研究会では、ポスト・ソビエト時代のカザフスタン北部の事例として、藤本が「犠牲祭と断食月のクルアーン朗誦――カザフスタンの映像に見るイスラームと死者供養の展開」について報告した。藤本は死者供養がカザフスタンにおけるイスラーム復興の中核を担っていると分析した上で、死者供養のために頻繁に行われるクルアーン朗誦の例を、犠牲祭と断食月に撮影した映像資料を用いて説明した。また、クルアーンの朗誦法と形態の多様性をテーマに研究を進めてきた小杉は「ムスリム社会に対する補助線の引き方」について報告した。小杉は自らが設定した各地のイスラームを比較するための項目に基づき、共通性と多様性の比率を数値化して示しただけでなく、礼拝における共通部分と差異について動画を用いて説明するなど、イスラームの共通項の多様性に着目する本研究会全体の議論の方向性に関わる重要な視点と問題を提起した。

このように初年度はメンバー各自が個々のテーマに基づいて進めている研究成果の一部を報告し、議論することで共通の問題を設定していくという方法で進めているが、メンバーの関心は儀礼、身体表現、映像論、食文化、経典、文学、物質文化など多岐にわたっており、今後、どれだけの問題意識を共有しながら議論を進めることができるのかという懸念もある。とはいえ2回の共同研究会を通して、異なる地域の事

ベトナム中南部にあるモスクの内部。ラマダンには礼拝の後に祖霊供養が行われる。

例を共通の問題意識の下で議論することの可能性は明らかになってきている。たとえば死者や祖霊など観念的なものについての名称や語源、クルアーンの朗誦法、礼拝に伴う動作などは、研究地域やテーマに関わらず比較可能な論点である。また各地域において人々が考える「ムスリム」とは何か、という問いや、他者表象と自己表象の差異なども比較可能な論点として挙げられよう。ひとまずこうした論点を共有した上で、2011年1月の第3回研究会では、阿良田によるインドネシア西ジャワの祖霊崇拝とイスラームに関する報告、および、菅瀬によるイスラエルにおけるアラブ人像とドラマに関する報告が行われた。

映像から明らかになること/ならないこと

ところで、本共同研究は2010年2月、3月に国立民族学博物館において開催された映像上映会『映像に見るイスラームの〈周縁〉』がひとつの出発点となっている。メンバーの大半が参加したこの上映会では、インドネシア、バングラデシュ、中国、ベトナムなど中東以外に暮らすムスリムや、イスラエルのキリスト教徒、トルコのアレヴィーなど、いわゆる「イスラーム世界」の「周縁」に生きる人々を対象とする映像作品が発表され、イスラーム実践の比較研究における映像資料の有効性が確認された。たとえば、イスラームの核としてゆるぎないものと見做されているクルアーンにしても、朗誦の仕方は実にさまざまである。こうした情報は映像を見ることによってより確実に伝達される。つまり、研究者によって色分けされ、文字化されて提示される資料とは異なり、映像に映し出されてダイレクトに伝達される情報は、地域横断的な比較研究にとって有効な手段となりうると考えられる。

インドネシア、西ジャワのムスリムによる祖霊崇拝の様子を説明するメンバー。

このようにして、本研究会では映像資料を報告媒体のひとつとして重視しているわけであるが、これまでの個々の報告による問題提起や全体討論を通じて、映像と文字という異なる媒体の特徴を活かした比較のための論点がいくつか提示された。それらを整理すると以下のようなものになる。

まず映像の場合は、身体の使い方、クルアーンの朗誦、服装、小道具の種類などを比較する上で、文字媒体よりも圧倒的に有効である。礼拝の仕方や動作、清めの仕方や動作など身体的なものには地域性が顕著に表れるのであるが、文字化されることによってそのことは捨象されてしまう可能性が高い。それは、地域によってさまざまな節回しの特徴が確認できるクルアーンの朗誦についても同じである。また、地域の枠組みにおいては自明とされている服装やモノに関しても、名称が同じであれば文字ではその特徴を知ることができない。

他方、霊魂、祖霊など観念的なものだけでなく、指導者の種類、名称、役割、礼拝や儀礼的実践についての名称や語源など映像を見るだけではわからないものについては、文字媒体による情報の提示も必要である。

これらの論点を念頭に置きつつ、今後の研究会でもメンバーおよびゲスト講師による報告と全体の議論を重ねていきたいと考えている。

よしもと やすこ

国立民族学博物館外来研究員。専門は文化人類学、ベトナム地域研究。論文に「イスラーム性とエスニック要素をめぐる交渉過程についての一考察：ベトナムにおける『チャム系ムスリム』の事例を中心に」（『関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）次世代国際学術フォーラムシリーズ　第2輯：文化交渉による変容の諸相』2010年）など。